

横山ゆずり作 「ブルータス！」

(効果音) (クラスのガヤ)
安藤良美 今日子、おはよう。
小西今日子 あ、良美。
良美 「あ」じゃないわよ。どうしたの、ボケッとしちゃって？ さては寝坊したな？
今日子 あのさ…。
良美 (さえぎるように) まあ、無理もないよね。あたしもさ、ジュンにあげるセーター編むんで、もう寝不足。でも絶対バレンタインまでには仕上げるんだ。ほかのファンの子たちに差つけないと、“本郷ジュン”の親衛隊の名がすたるもんね。
ナレーション 小西今日子と安藤良美は、私立女子中学の3年生。二人は、今をときめくアイドル歌手、本郷ジュンの熱烈なファンで、親衛隊まで結成しているほどでした。
良美 でもさ、今日子が「ジュンにセーター編む」って言ったから、安心したよ。だってさ、今日子ったら最近ジュンの話しないし、こないだのファンクラブの集会にも来なかったからさ。
今日子 良美、あたしさ…。
良美 ン、何よ？
(効果音) (始業のチャイム)
良美 あ、授業始まっちゃう。じゃ今日子、またあとでね。あ、そうだ、持ち物検査の時、気をつけたほうがいいよ。昨日、うちのクラスのマッチのファンの子がさ、レコードとかポスターとか、みんな取り上げられたんだから。じゃね！
今日子(モノローグ) あーあ、また言いそびれちゃった。困ったなあ。あのセーター、「ジュンにあげるためのものじゃない」なんて言ったら、良美、怒るだろうな。あれは…。
(音楽) (ブリッジ 回想)
高橋先生 じゃ今日のホームルームはここまで。個人ノート持ってきた者は出してくれ。
今日子(モノローグ) 個人ノートか。高橋先生との、この交換ノートで、今までいろんなこと相談したっけ。先生、キリスト教の信者だって言ってたけど、ほんと、親身になって考えてくれるんだよね。でも、まさかいくら高橋先生でも、こんなこと言えないもん。
ナレーション そして、数日後のある日 。
良美 今日子、もうほとんど完成じゃない。やったね。
今日子 まあね。ここまで編むの、苦労したわよ。特にそでのとこがさ。
クラスメート なあになあに？ 見せて。ワァ、今日子、スゴーい。できたんだ。きつとヒロ君、喜ぶね。
良美 え？

今日子 ち、違うのよ。これは…。

クラスメート なんだ、弘昭君に上げるんじゃないの？

良美 ちょっと、今日子、弘昭ってだれよ？

今日子 なんでもないわよ。

クラスメート 何よお、今日子ったら。隠すことないじゃん。やっとできたカレなんだからさ。あんただって、「手の届かない芸能人よか、顔は少しマズくても、やっぱり身近なほうがいい」って言ってたじゃん。

良美 どういこと？ 今日子、あんた、ジュンにあげるってウソだったのね？ だましてたんだ、あたしを。

今日子 そうじゃないんだってば。

良美 言い訳なんか聞きたくないね。もうあんたとは友達じゃない。せいぜいそのヒロって子と仲良くしなさいよ。裏切り者！

今日子 あ、良美、待ってよ。

クラスメート あたし、ヤバいこと言っちゃったかなあ。

今日子(モノローグ) 最悪だわ。

ナレーション そう、今日子にとって、それは、最悪の事態でした。今更良美に弁解する言葉もなかったのです。

(効果音) (授業中)

高橋先生 さ、今日は 35 ページからだったな。まず、この前の復習からだが...(オフ)

今日子(モノローグ) あーあ、どうしよう。良美をだますつもりなんかなかった。でも、結局は同じことか。あの子が怒るのも当たり前だよ。でも、あたしの話も聞いてくれたって…。

高橋先生 こら！ そこ、小西、小西今日子。どうしたんだ、ボンヤリして？ おれの授業はそんなにつまらんか？ しっかり聞いとけよ。

今日子 あ、すみません。(モノローグ)世界史の授業なんか聞いている場合じゃないのよ、あたしは。

高橋先生 …そこで、紀元前 60 年には、このシーザーとグラッスス兄弟による三頭政治が始まるわけだな。今流行の言葉で言えばトロイカ方式だな。ところがシーザーの野心は、権力を一手に握ることだった。そこで機をうかがって、数年後には独裁制を敷いて、思いのままの政治をやる。だがそれでは当然面白くない連中がいて、共和黨員を中心にひそかにシーザー暗殺計画が進み、ついに BC48 年、彼が元老院を出たところを待ち伏せて、襲いかかる。この暗殺計画に加わったのが、シーザーが信頼していたブルータス。シーザーはナイフ一本で必死に防戦するんだが、敵の中にこのブルータスの姿を見ると、もはや抵抗をやめて、敵のなすに任せ、一代の英雄のあえなき最期とは相成った、というわけだ。

今日子(モノローグ) ブルータス？ 主人を裏切ったブルータスかぁ…。

高橋先生 その時のシーザーの言葉は、「ブルータス、お前もか？」というんだ。つまり、一番信頼していた者にまで背かれたシーザーの悲痛なうめきだな、この言葉は。

今日子 …ううん、違うわ。あたしは裏切るつもりなんかなかったのよ。

良美 (エコー)あたしをだましてたのね。裏切り者。裏切り者！(多重エコー)

今日子 やめて！

高橋先生 どうした、小西？

今日子(モノローグ) あ、いけない、授業中だった。

高橋先生 夢でも見たのか？ 残念だがな、まだ授業やめるわけにはいかんな。あと 15 分ある。悪いな。

一同 (笑い)

ナレーション そして、待ち遠しかったはずのバレンタインデー。今日子は重い心持ちで登校したのですが…。

生徒たち (口々に)「おはよう」「おはようございます」

野沢先生 あ、小西。

今日子 あ、野沢先生。おはようございます。

野沢先生 ちょっと、教員室に来なさい。

今日子 え？…はい、じゃ、教室にカバン置いてきます。

野沢先生 いいから、そのまま来なさい。

今日子 …はい。

野沢先生 小西、そのカバンを開けてみなさい。

今日子 え？ カバン？ どういうことですか？

野沢先生 中を見せなさいと言ってるんだ。“授業に関係ないものは持ってきちゃいかん” という校則は知ってるはずだな？

今日子(モノローグ) あ、持ち物検査！ どうしよう。今日はバレンタインだから、弘昭にあげるセーターとチョコが入ってるんだ。でも、どうしてあたしだけ…？

(効果音) (カバンを開ける音)

野沢先生 これはなんだ？ こんなもの、持ってきていいと思っているのか？

今日子 でも、今日は…。

野沢先生 「でも」じゃない。バレンタインデーだかなんだか知らんが、こんな浮ついた気持ちでどうするんだ。大体、小西、我が校は男女交際は禁止されているはずだぞ。これをだれにやるつもりだったんだ？ まあいい。あとで家庭のほうに連絡しておくからな。

今日子(モノローグ) そんな…。どうして？

(効果音) (クラスのガヤ)

クラスメートA 今日子、元気だしなってば。

クラスメートB そうよ。気にすることないって。でもひどいよね。あの生活指導の野沢、何も朝礼で今日子のこと名指しで言うことないじゃん。

クラスメートA ほんとよ。でもさ、どうしてバレたんだろうね、今日子だけ。

今日子 うん、あたしも分かんないんだ。

クラスメートB これはうわさだけだよ。チクった子がいるんだって。

今日子 ウソ！

クラスメートB あんたには言いにくいけどさ。昨日、B組の安藤が、野沢と話してるの見た子がいるんだ。

今日子 良美が？ ほんとに？

クラスメートA えー、だって、安藤良美って、今日子と一緒に、本郷ジュンの親衛隊やってた子でしょ？ 仲良かったじゃない。

クラスメートB んー、だからさ、うわさよ、うわさ。あ、今日子、どこ行くのよ？

(効果音) (走り去る音)

今日子 良美、良美。

良美 何か用？

今日子 あんたなの、野沢にあたしのこと言ったの？

良美 何のことよ。ヘンな言いがかり、やめてよね。知らないわよ、アンタガチョコやセーター持って...あつ。

今日子 ほんとだったのね。赦^{ゆる}せない。

良美 だったらなんだって言うのよ？ あんた、人のこと言えるっての？

今日子 なんですって?!

(効果音) (周囲、騒ぎ出す)

高橋先生 何騒いでるんだ？ もうチャイムは鳴ったぞ。小西、あとで先生のとこに来なさい。

(効果音) (教員室のドアの開く音)

高橋先生 ああ、小西か。座りなさい。お前、最近おかしいぞ。何かあるんだったら話してみなさい。

今日子 話せません。

高橋先生 なんだ。ま、先生じゃ話しにくけりゃ、友達でも相談したらどうだ？

今日子 友達なんて、信用できません。

高橋先生 おいおい、穏やかじゃないな。なんだか知らんが、人に言えばラクになることもあるぞ。

今日子 ...はい。実はこの前...

ナレーション 今日子は、戸惑いながらも、しばらく前から心に引っかかっていた良美とのこ

とを、高橋先生に話しました。

今日子 先生、確かにあたしも悪かったと思います。でも良美ったら、あんまりです。裏切り者はあっちよ。

高橋先生 小西、お前は、安藤にとって、どういう友達だったんだ？

今日子 え？「どういう」って…。それは、えっと、一緒にジュンのコンサート行ったり、ジュンの歌の振り付け覚えたり…、とにかく親友でした。

高橋先生 同じ歌手のファンだと親友なのか？ いいか、小西。この際、どっちが裏切ったかなんていうのは小さいことなんだ。大切なのは、お互い、“自分にとって相手はどうなんだ”、じゃなくて、“相手にとって、自分はどのような友か”、ってことじゃないかな。こういう言葉、知ってるか？「人、その友のために命を捨てる。これより大きな愛はない」(ヨハネ 15:13)

今日子 “命を捨てる”だなんて、オーバーだわ。

高橋先生 うん。たった一つしかない命だもんな。そう簡単には捨てられないよな。だが、ここで言うてんのは、相手をほんとに友達として付き合うなら、とことん友達の気持ちになって、そう、必要なら命をさえ差し出すほどに、相手を大切にすることじゃないかな。事のきっかけが、そのジュンのためのセーターってのは少々たわいがないが、お互いの信頼が強ければ強いだけ、それが傷ついた時のショックや反動も大きいものなんだ。もし自分が安藤の立場だったら、って考えたら、小西、分かるだろ？

今日子 …はい。だから、余計言えなかった。

高橋先生 うん。その辺は、じっくり心を開いて話せばきっと分かってもらえるよ。破れた友情を取り戻すのは、自分の責任だ。それほどに安藤との友情は自分にとって大切なんだって思ったら、小西、安藤の懐に飛び込んでいってみろ。死んだ気になって。

ナレーション 今日子は、ちらりと良美の顔を思い浮かべました。そして思わず、「人、その友のために命を捨てる。これより大きな愛はない」とつぶやいたのです。

< 完 >